発達理論の学び舎

Back Number: Vol 24

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2017

目次

461.記憶の自己展開

462.アヒルとパーソナリティ

463.自己展開力を支援する存在

464.クネン先生とのミーティングより

465.パーソナリティの再考に向けて

466.オランダ語の最終試験を終えて

467.潜在的発達空間

468.真の課題から目を背けさせる社会

469.深海と個の発見

470.専門家の見立ての頼りなさについて

471.促しと探究心

472.何気ない日常から

473.発達的大変動

474.言葉の深層世界に飲み込まれて

475.同志

476.FCフローニンゲンの日本人選手獲得の可能性

477.無数の言語ゲーム

478.圧倒からの弾み

479.表現エネルギーの伝承

480.日常的な非日常的休日

461. 記憶の自己展開

以前言及していた、サラダとチーズが主体の食生活を少し見直そうと思う出来事があった。それ以降、少し変化のある食生活になっている。今日は街の中心部のスーパーで手巻き寿司を購入した。

近くのスーパーには残念ながら日本食は置いておらず、街の中心部にあるスーパーに行かなければ日本食にありつくことができない。日本食と言っても、寿司しか置かれていないのだが、置かれているだけでも有り難い。

実は三日前から寿司を食べることを計画しており、スーパーで購入したわずか4ユーロに満たない握り寿司を、自宅の食卓で口に運んだ瞬間、思いがけないほどの感動を味わった。それぐらい私は日本食に飢えていたのかもしれない。

実際に、この二ヶ月半は日本食を口にすることはほどんとなく、和食主体の生活からかけ離れていたのだ。食生活というのは、他の生活習慣と同様に、自分を形作る重要な生活実践である。

どのような食べ物を身体に取り入れるかは、どのような知識を精神に取り入れるのかと同じぐらい重要である。今日口にした握り寿司のセットは、実にありふれた具材だったかもしれない。

しかしながら、そうしたありふれた具材の中でも、最も些細な具材と思われるキュウリ巻きを口にした瞬間、喚起されるものがあったことには驚きである。それを口に入れた瞬間、日本の夏が蘇ってきたのだ。

その後、キュウリにまつわるありとあらゆる思い出が記憶の玉手箱から溢れ出してきた。目の前の寿司をゆっくりと味わうごとに、無数の記憶が喚起されるという状態の中に私はいた。

ここでも外部にある対象物の刺激によって、内側に現象が引き起こされるという図式が見て取れる。より正確には、外部からの刺激によって、内側で思考や感情が沸き起こり、そうした思考や感情が自己展開を始めるという図式である。

© YOHEI KATO 2017

確かに、記憶の出発点を生み出したのはキュウリ巻きだったのだが、その出発点が一度生まれると、あとは一つの記憶が別の記憶を導き出していくという自己展開が起こっていたのだ。主観的な現象が外部からの刺激に誘発されて生じることだけではなく、そのようにして生じた一つの現象をきっかけに、主観的な現象が自己展開を開始するというのは注目に値することだと思った。

今回のケースで考えると、一つの記憶から別の記憶が次々に想起されていったわけであるが、触媒となった記憶と新たに想起された記憶との間には、どのような関係があるのだろうか？私には認識できないようなネットワーク構造があるのだろうか。

直感的に理解できるのは、それらの連鎖がランダムに起こっているわけではなく、何かしらの関係性や法則性のもとに生み出されているということである。もしかすると、これはダイナミックシステムアプローチを脳の研究に適用しているコネクショニズムの研究領域に近い話なのかもしれない。

記憶は無秩序に想起されるのではなく、一見無秩序に見えるものの中に存在する秩序性によって想起されているような気がしたのである。先ほど想起された記憶の連鎖をたどってみると、やはりそこには何かしらの関係性があるようなのだ。

ただし、まだよくわからないのは、記憶間の関係性というよりも、自己展開を生み出す力そのもの、つまり記憶を連鎖させる力そのものの正体である。この力の正体は、思考が思考を生み出す自己展開力とほとんど同一のものなのではないかと思う。

仮にこの力の正体が分かれば、知性や能力の成長を考える上で大きな発見事項になるだろう。ここで一瞬嫌な予感がしたのは、それは「自己組織化という現象である」と一言で片付けてしまいそうな自分がいることだ。

今着目しているのは自己組織化という現象そのものではなく、自己組織化を生み出している内在的な力そのものなのだ。このテーマは一筋縄ではいかない。アリストテレスやカントが何やらヒントになるようなことを述べていたように思うので、彼らの発想を参考にしながら時間をかけて探っていきたい論点だ。

© YOHEI KATO 2017

この続きを考えるためには、来週また街の中心部へ行き、スーパーで同じ寿司を購入する必要があるかもしれない。

462. アヒルとパーソナリティ

今日は、論文アドバイザーのクネン先生と研究プロジェクトに関するミーティングを行った。決められたペースで定期的に行われるこのミーティングのおかげで、研究が順調に進んでいくのを実感している。

昨日は非常に暖かい日曜日であり、初冬の中休みという印象を私に与えた。今日も引き続き比較的暖かい一日であった。クネン先生とのミーティングは、社会行動科学キャンパスにある先生の研究室で毎回行われる。

自宅から社会行動科学キャンパスに向かう道中、ノーダープラントソン公園を通るのは、日課でもあり、儀式的なものでもある。静寂な環境と澄み渡る空気の中で小鳥のさえずりがいつも聞こえる。噴水が湧き出る音も遠くの方から静かに聞こえる。

毎回この公園を訪れるたびに、自分の意識状態が全く別種のものになることを感じている。自然の持つ力は途轍もなく大きい。私は、自然なしでは生きていけないタイプの人間なのだとつくづく思う。

この公園が生み出してくれた観想的な意識状態の中で、自分が観想的な意識状態にいるということを自覚していた。そうした自覚を持ちながら、あたりの景色を見渡すと、通常の意識状態では発見できないようなことに多々気づく。

それは自分の内側で絶えず変化をし続けている思考や感情の波かもしれない。あるいは、そうした波そのものを生み出す内在的な力かもしれない。それらのことに気づくかせてくれるのが、この不思議な意識状態の特性である。通りかかった池の前に、十数羽のアヒルがおとなしく固まっているのが見えた。

何をしているのかそっと近寄ってみたところ、彼らは寝ていた。生まれて初めて、アヒルの寝顔をまじまじと観察したのだ。その時、「アヒルの寝顔とはこのようなものなのだ」ということに初めて気づくことができ、さらに、アヒルは睡眠中に顔を後方にひねって目を閉じていることにも気づいた。

一つ観察の視点が足りなかったのは、首をひねる方向は右なのか左なのかという点だ。私は昔から仰向けになって寝ることができないため、左に顔を傾ける形でうつぶせになって寝る。人によって顔を傾ける方向は、左なのか右なのか違うと思う。

それと同様に、アヒルにも顔をひねる方向に個性があるのか実に気になるところだ。次回、早朝にノーダープラントソン公園の池の前を通る時は、この点に注意してアヒルの寝顔を観察してみようと思う。

実は昨日、性格の不変性とアイデンティティの変動性について考えていたことと、今回のアヒルの件は深い関係性があると思っている。一般的に、私たちの性格は一生を通じて大きく変わることはない。一方、アイデンティティは発達段階に応じて大きく変化していく。

人間の精神の中に、不変的なものと変動的なものがともに存在しているというのは大変面白い点であり、両者の違いを考察することで、人間の内面世界に対する新たな理解が開けてきそうな予感を持っていたのだ。アヒルの寝顔を見ながら、彼ら動物にも性格というものがあるのだろうと思った。

しかし、彼らにはアイデンティティと呼ばれるものはなさそうであり、彼らが生涯にわたって独自のアイデンティティを発達させているようにはどうも思えない。そう考えると、性格というのはアイデンティティよりも根源的な何かなのかもしれないと思わされる。

アメリカの思想家ケン・ウィルバーのインテグラル理論では、人間の性格は類型（タイプ）に関係するものであると分類され、アイデンティティは段階（レベル）に関係するものであると分類される。性格とアイデンティティには、そのような分類だけでは見えてこないものがあるのは確かだ。

二週間前に、渡欧に際して日本から船便で送った書籍が届いた時、性格（パーソナリティ）に関する書籍だけを並べた本棚の一画がやたらと気になっていたことを思い出した。今の私はどうやら性

格というものに再び関心を示しているようであり、この関心に従って関連書籍に目を通してみようと思う。2016/10/17

463.自己展開力を支援する存在

今日のクネン先生とのミーティングも大変実りあるものであった。毎回のミーティングでは、次回までの課題を明らかにし、その課題に対する自分なりの回答をまとめてクネン先生に提出するというのが、決まった流れになっている。

現在取り掛かっているのは、論文の骨子となる提案書である。先日受けた助言をもとに改稿した二度目のドラフトを事前にクネン先生に送り、それに対する先生のコメントをもとに、今日のミーティングが行われた。

この提案書を論文審査委員会に提出するまでに、実はあと二ヶ月の時間があるのだが、今の時期から論文の骨子を固めておけば、研究が非常にスムーズに進むと思っている。クネン先生からのアドバイスに従い、今の段階では提案書の規定文字数を意識することなく、研究の背景や方法論に関してできるだけ詳しく論述するように心がけている。

この提案書の内容を肉付けしたり、あるいは余分な箇所を削ぎ落とす形で、実際の論文に盛り込んでいくことができるのだ。米国の大学院時代を振り返ってみると、クラスの期末ペーパーにせよ修士論文にせよ、これまでの私は文章の骨子をそれほど明確にしないまま執筆に着手していたように思われる。

当然ながら、何を文章として表現したいのかを事前に考えることは行っていたのであるが、往々にして、書くべき項目の列挙をするぐらいだったように記憶している。当時の大学院にも親切な教授が何人かいて、彼らのクラスでは、期末ペーパーのストラクチャーを事前に提出することが義務付けられており、自分のストラクチャーに対して添削を施してくれる教授がいたことを覚えている。

事前にしっかりとアウトラインを作成するか否か、そして教授からの添削があるとなしでは、実際の文章の質が大きく左右されるということを学んだ。今クネン先生と少しずつ提案書をより良いものにし

ていこうと共同作業を行っており、そうした作業によって文章が徐々に洗練されていく姿を見ると、それはさながら彫刻を掘るような仕事に似ている。

丹精を込めて彫刻を彫っていけばいくほど、彫像が徐々に形となって眼の前に現れてくるかのように、文章も練れば練るほど新しい形となって眼の前に現れてくるのである。クネン先生からの指導と共同作業によって、私は研究の内容もさることながら、それ以外のことも多く学んでいる。

一回目の手直しを終え、二回目のドラフトに関して、研究の背景や目的に関してはほとんど修正箇所がなかった。ただし、今回の研究で用いるカート・フィッシャーのスキル分析に関して、もう少し説明を追加する必要があることがわかった。

私は得られた定性データに対してスキル分析が適用できることを所与のものとしていたが、これは論文の読者にとっては所与ではない可能性があるため、説明を加えておく必要がある、という指摘をクネン先生から受けた。指摘された通り、私はそのような思い込みを持っていたように思う。

他者に文章を読んでもらい、それに関するフィードバックを受けることによって、自分が抱えている思い込みや前提認識などに改めて気付くことができる。こうしたことを一人で行うのは至難の技であり、やはりスーパーバイザーの存在は非常に大きいと感じている。

私は成長や発達を支援するコーチやメンターとして企業組織と関わらせてもらうことがあるが、どうもこれまでは、自分がコーチやメンターを付けることに関しては少し懐疑的な思いを持っていたのだ。しかしながら、そうした懐疑的な思いもクネン先生との共同作業によって徐々に消えつつある。

クネン先生の研究室を訪れるまでの今日の自分の足取りの軽さを見てみれば、それは一目瞭然である。当然ながら力量を持ったコーチやメンターに限るが、そうした人物は、私たちが不可避に持っている盲点を私たち自身の力によって気づかせるように支援してくれるのだ。

それ以上に重要なのは、優れたコーチやメンターは間違いなく、私たちの自己展開力を刺激する触媒としての役割を果たしているように思う。今日のクネン先生とのミーティングがやはり触媒となって、自分の思考が次々に展開していくのがわかる。今日も実りの多いミーティングであった。

© YOHEI KATO 2017

464. クネン先生とのミーティングより

今、本日のクネン先生とのミーティングの内容を振り返るという作業と、明日に迫ったオランダ語の最終試験に向けての学習との間で行ったり来たりしている。改めてクネン先生のコメントが入った提案書を読み返してみると、研究の背景と目的のパートとリサーチクエスチョンのパートとの間に少しばかり飛躍があることに気づく。

前回のミーティングの際もこの点を指摘され、その溝を埋めるように文章を追加したのだが、やはりまだ少し飛躍があることがわかる。説明や論述の際に、自分の中で所与のものをついつい明記しない癖があることに気づかされる。

自分が所与としている前提を明記しない場合、たいていそこに思わぬ落とし穴がある。興味深いのは、自分が前提としている考えを客体化させ表に出してみると、落とし穴の存在に気づくだけではなく、落とし穴の中に新しい発見が眠っていることに気づいたりすることが起きるのだ。

今回もクネン先生との対話を通じて、落とし穴の存在を特定するだけではなく、そこを掘り下げていくと、思わぬ研究アイデアが生まれてくるということを体験した。また、より明確にしなければならないのは、変数の設定であることにも気づかされた。

今回の研究ではダイナミックシステムアプローチを活用しながら、成人のオンライン学習における動的な学習プロセスを探求していくのだが、その際に変数をきちんと特定していくことが重要になる。というのも、ダイナミックシステムアプローチは研究者が設定した変数をもとに、理論モデルと数式モデルを組み立てていくため、変数の設定無くしては研究が成り立たないのである。

確かにカート・フィッシャーのダイナミックスキル分析を適用することによって、学習者が用いる概念の複雑性が明らかになり、それは一つの主要な変数になる。しかし、問題となっていたのは、それ以外の変数をどのように設定していくかということである。

前回のミーティングでクネン先生から勧められたように「グラウンデッド・セオリー」を用いることによって、クラス内の対話をカテゴリー分類し、それらを変数として設定するというのは一案である。

実際に、教師がどのような問いかけの種類を用いてクラスを進めているのか、それらに対して学習者はどのような反応を見せるのかに私は関心があり、そうした教師・学習者間のやり取りの種類を変数として設定したいという思いがある。

これまでのオンライン学習の経験上、教師がどのような問いかけを用いるのかによって、学習者が用いる概念の複雑性に変動が生じるのを感覚的に把握しており、今回の研究ではその辺りを科学的に分析してみたいと思うのだ。

どのような種類の問いかけが学習プロセスを促進するのかが明らかになれば、この発見事項はコーチやセラピストなどの、言葉によってクライアントを支援する専門家にも、有益な視座を提供することになるだろう。今週と来週は試験週間に入るため、次回のミーティングは三週間後となった。

次回のミーティングでは、クネン先生と定性データを眺めながら、どのようなやり取りが教師・学習者間で行われているのかをディスカッションする予定である。次回のミーティングに向けて、フィッシャーのスキル尺度を用いて、一回分のクラスのデータを定量化しておくことと、定性データを眺めながら自分なりにどのような種類のやり取りがなされているのかを考え、できれば幾つかの概念カテゴリーを設定しておきたい。

465.パーソナリティの再考に向けて

少し前に言及したように、人間のパーソナリティに対して強い関心が私の中で湧き上がっている。書斎の本棚から、“Personality psychology: A student-centered approach (1995)”と“An introduction to theories of personality (1998)”を取り出し、それらを同時並行で読み進めている。

どちらの書籍にも懐かしい思い出があり、これらの書籍は、私が四年前に留学していた米国のジョン・エフ・ケネディ大学の図書館で購入したものである。どのような基準で図書館の書籍が売りに出されるのかは定かではないが、どちらの書籍の貸し出しカードにも借りられた痕跡がほとんどない。

これらの本が多くの人の手に取られることはなかったようであり、それが理由となって売りに出されていたのかもしれない。結局これらの本をそれぞれ一ドルほどで購入できたのだ。ほとんど読まれて

いないため、本の状態も良く、何より得るものが多い書籍であるにもかかわらず、このような価格でこれらの書籍を購入できたことは、今になって思うと信じられないものがある。

仮にこれらの本が日の目を浴びることがなかったとしても、これから自分が読み進めることによって、少しでも光を与えることができればと思う。以前、認知的発達心理学者のオットー・ラスキー博士に師事していた時、私は多くのエネルギーを彼が提唱した弁証法思考の発達モデルを理解することに費やしていた。

そのような中、当時のラスキー博士はよく私に、「もちろん認知的な構造的発達にも関心があるのだが、最近はパーソナリティの探究にも力を入れている」と述べていたことを思い出した。

実際に、ラスキー博士が提唱した「構成主義的発達論のフレームワーク（constructive developmental framework）」の中には三つの理論モデルがある。そのうちの二つは段階モデルであり、もう一つはパーソナリティに関する理論モデルなのだ。

パーソナリティの研究は多くの心理学者によってこれまで行われているが、その中でも非常に重要な功績を残したのがハーバード大学の心理学者ヘンリー・ミュレーである。ミュレーの弟子にあたるモリス・アダーマンが開発した「欲求・圧力分析」を評価手法として採用していることは、ラスキー博士の発達モデルのユニークな特徴である。

ラスキー博士の下で学習をしている当時、私は段階モデルの探究の方に関心を示していたため、パーソナリティの探究にはそれほど熱心ではなかったように思う。それから月日が経って、少しずつパーソナリティに関する理解を深めていこうという気持ちになったのだ。

そうしたきっかけを生み出したのは、以前紹介したように、パーソナリティとアイデンティティを比較し、両者の相違点にふと目が向かったことであった。パーソナリティというのは、間違いなく何物にも代えがたい固有の特性であり、その固有性のゆえに、私たちを呪縛するという性質も同時に持ち合わせている不思議な存在である。

そして、パーソナリティはアイデンティティのように段階的な発達を遂げていくというよりもむしろ、幼少期の頃に形成されたものをそのまま引き受ける形で存在するという特徴がある。確かに、構造的

© YOHEI KATO 2017

な段階は独自のレンズを生み出すが、性格的なものも固有のレンズを生み出していることを忘れてはならないだろう。

現在、私は毎日のように自分の世界認識手法を疑って検証するような試みを継続させているが、それは今の自分の発達段階が持つ固有の限界のみならず、幼少期に形成された私の性格が生み出す固有の限界に気づくという試みをしているように感じる。

そこには無数の限界が存在しており、それらを一つ一つ解体し、新たな認識の枠組みを構築しようとする、気の遠くなるような作業に知らず知らず従事させられている自分がいるのだ。

アイデンティティに関してはこうした作業の成果を垣間見ることがあるのだが、パーソナリティに関してはそれが難しいように思う。以前言及したように、自分の内面に焦点を当てて文章を書くことによって、アイデンティティを客体として捉え、徐々にアイデンティティの引き剝がし現象のようなものが起こり、質的な変容を遂げることを目撃することがある。

しかし、パーソナリティをいくら客体化させても、アイデンティティのような引き剝がし現象が起こらないのである。これをタイプとレベルという分類上の違いと簡単に捉えることはもちろん可能なのだが、それだけでは納得のいかない特徴をパーソナリティは持っているように思う。

それはまさに、パーソナリティは質的変容が目に見える形で起こらないということであり、質的に変容しないものを常に私たちに突きつけているという特徴である。パーソナリティが大きな質的変容を遂げることはほとんど無いということの中には、何か重大な秘密が隠されている気がするのだ。

466.オランダ語の最終試験を終えて

今日、全13回にわたるオランダ語コースの締めくくりとして最終試験を受けてきた。実際のクラスは次回が最後であり、最後のクラスでは、おそらく今日の最終試験の復習をするのだろう。

最終試験の感想としては、中間試験の出来よりも少々良いぐらいだろうか。今回の試験には、前回あまり出来が良くなかったディクテーションがなかったことには少し拍子抜けをした。文法に関してもしっかりと復習をしていたため、ほとんど間違えていないと思う。

ただし、最後の読解問題は内容を理解するのに少し苦しんだ。内容の理解は不十分なのだが、設問にはなんとなく答えられてしまうというような感じであった。ここから、スピノザの原書をオランダ語で読む日はかなり先のことであると思わされた。

振り返ってみると、これまで成人になってからも、数々の試験を受けてきたように思う。それらの試験は基本的に、全ての問題に正解することがなかなか難しい作りになっており、今の私は義務教育時代のように、試験に関して完璧を期することはもはや無くなっている。

これが好ましいことなのかは別として、今回の最終試験の出来にはそれなりに満足するものがあるのは確かである。そもそも、成人になってから発達心理学を学ぶことによって、試験の出来そのものよりも、試験に対する捉え方や活用の仕方や意味が変化したように思う。

成人期前に比べて、今の私は各種の試験を自分の学習プロセスの中にうまく組み入れることができているように思う。具体的には、現在の自分の知識レベルや能力水準を確認するためであったり、習得すべき知識やスキルを再度振り返るために試験をうまく活用しているように思う。

学習プロセスの所々に試験のようなものを組み入れることは、学習プロセス自身をうまく刺激することにつながっていると実感している。実際に、試験があるおかげで、学習プロセスにメリハリがもたらされているのだ。

学習には変動性が不可欠であるが、ある意味試験が変動性を促すような働きをしているように思うのだ。基本的に試験の前には、必ず学習時間が増加するため、学習時間の波が高くなる。往々にして、十分な学習時間を積めば、知識や能力水準は増加するため、試験は活用の仕方によって、私たちの知識レベルや能力レベルを高めることにつながると考えている。

理想としては、何かを独学する際にも、試験のようなアセスメントを取り入れたいものである。おそらく無意識的に、自分が探究している領域の知識レベルを自己把握するようなことを行っていると思うのだが、これを無意識的ではなく、何かしらの客観的な測定手法に基づいて自己評価をする必要があると思っている。

© YOHEI KATO 2017

往々にして何かの分野を独学する際には、現在の自分の立ち位置を理解することに怠惰であったり、基準となるものがないために、学習を前に進めていくことが難しい場合があるだろう。明日の「タレントディベロップメントと創造性の発達」のクラスでは、ちょうど知性や能力の評価手法を取り扱うので、自分の学習プロセスの中にどのようなアセスメントを組み入れるのかを考えていきたい。

必要であれば、構造的発達心理学のアセスメント手法と組み合わせる形で、独自の測定手法を作り上げていこうと思う。とにかく今回のオランダ語のクラスのおかげで、オランダ語の語学レベルを向上させることができたことのみならず、試験に対する自分の考え方を深めるきっかけになったことは思わぬ副産物であった。

467.潜在的発達空間

オランダ語の最終試験終了後、フローニンゲンの街の中心部にある市場を訪れた。以前そこで購入したチーズがとても美味しかったため、再び同じものを購入しようと思ったのだ。

オランダ語の試験が終了して少し安堵したのだろうか、市場を訪れた時の私の頭の中はオランダ語ではなく、すっかり英語に切り替わっていた。日常生活の中でオランダ語でやり取りをする機会は、買い物の時ぐらいしかない。

そのため、このような市場での買い物というのは、私にとってオランダ語を生きた文脈で活用する絶好の機会なのである。それにもかかわらず、今回は注文の最初から英語を自然と口ずさんでしまう自分がいたのである。

もしかするとその時の私は、予期せぬ言語表現に出くわすことを少し恐れていたのかもしれない。実際の現実世界で他者と言葉をやりとりする際には、教科書に書かれているような型どおりに会話が進行しないことは頻繁に起こりうる。

また、全く未知の単語や文法構造に出くわすことも頻繁にあるのだ。そうした状況に出くわすことをためらっていた自分がいたことは隠しようがない。今日の自分はいつもとは異なり、学習に関して消極的だったと言える。

やはり言語の学習にせよその他の学習にせよ、何が起こるかが予期できるような空間ではなく、何が起こるのか未知であるような空間に、積極的に参与していくことが重要だと思うのだ。もちろん、学習の初期段階においては、何が起こるのかが予期しやすい安全な環境で学習を進めていくことも重要だろう。

しかし、そうした守られた環境の中にいつまでも浸っていると、学習は一向に進まないのである。教室空間という守られた安全な学習空間では、確かに型を学ぶのには最適かもしれない。だが、型をある程度獲得したら、躊躇せずに未知なる空間で実践経験を積む必要がある。

そうした過程では当然ながら未知の出来事に遭遇するであろうし、既存の知識や技術が通用しない局面と必ずぶつかるはずである。しかし、それらの出来事や局面は、まさに私たちを成長させるきっかけになるのである。

それにしても、私たちの成長や発達が既存の場所にないというのは興味深いことである。つまり、私たちの成長や発達は、必ず未知なる空間からやって来るものなのだ。未知なる空間に存在している未知なるものが発達を呼び込むのである。

未知なる空間は未知なるものを生み出す母体となり、未知なるものは私たちの成長や発達を呼び込む力を持っている。そのように考えると、私たちにとって未知なる空間は、「潜在的発達空間」と呼べるものなのかもしれない。

ここで重要なのは、そうした潜在的発達空間の中で揉まれながら実践を積む必要があるということだ。これは人間の本質的な特性かもしれないが、どうも私たちは安全な空間にいる場合、未知なるものを見落としてしまいがちなのではないだろうか。

未知なるものは安全性を破壊しかねないため、その空間にいることが心地よい場合、あえて未知なるものを見つけようとする意志が原理上働かないのである。未知なるものに発達を生み出す内在的な力が備わっているのであれば、安全な空間の中で、未知なるものと直面しないような状況に浸っていることは、さらなる発達につながらないように思うのだ。

© YOHEI KATO 2017

そうしたことを考えると、知識や技術の基盤となる安全基地をある程度確立した上で、いかに積極的に未知なる空間、つまり潜在的発達空間の中に飛び込んでいけるかがさらなる発達の鍵を握るように思う。潜在的発達空間というのは見つけるのが難しいのではなく、逆に見つけられないことの方が難しいのだ。

要するに、私たちの日常は本質的には、潜在的発達空間で満たされているということなのだ。まさに今日訪れた街の市場のように。しかしながら、私たちは現在の発達段階という安全基地に縛り付けられているため、その一歩外にある広大無辺な潜在的発達空間に飛び込むことを躊躇してしまうのだ。

市場から自宅に戻り一息ついたところで、急に激しい雨が降ってきた。その雨の激しさは稀に見るものであり、フローニンゲンの街で生活を始めてから最も激しい雨であったと言える。窓に叩きつけられる大粒の雨を見ながら、この雨の積極性に心を打たれた。

果敢に大地に突撃する雨を見て、それは天からの激励の雨だと受け取った。一時間後、先ほどの激しい雨が嘘のように止んでいるのに気づいた。怒涛のように降り注いだ激励の雨が通り過ぎた後の世界は、絵も言わぬ静寂さに満ちていた。

468. 真の課題から目を背けさせる社会

夕方から一時間ほど、激しい雨がフローニンゲンの街を襲った。窓からしばらく通りを眺めていると、激しい雨の中を勇敢に自転車をこぐ人たちの姿が何度も目に入った。カッパを着ることも傘をさすこともなく、雨に濡れながら自転車をこぐというのは、こちらの文化的慣習のようである。

斜めに降り注ぐ激しい雨に対峙する形で人々が自転車をこいでいるのを見て、真の課題から目を背けさせる社会の存在について考えが及んだ。今目の前で降り注いでいる雨は、自転車をこぐ人たちに対して、ある種の課題を突きつけているように思えたのだ。

一方で私たちの社会はどうもこのような雨とは異なり、私たちに何かを突きつけることを避けているような印象を受ける。厳密には、私たちの社会は絶えず私たちに固有の課題を突きつけているはず

なのだが、社会の文化や仕組みがそうした課題と私たちが直面することを巧妙に回避させているように思えるのだ。

エリク・エリクソンやロバート・キーガンが指摘するように、私たちが発達をする際には、必ず固有の発達課題を乗り越えていく必要がある。そして発達課題を乗り越えていくための前段階として、そうした課題と向き合う必要があるということを忘れてはならない。

だが、私たちの社会にはどうも、自分に突きつけられた真の課題と向き合うことを奨励しないような風潮があるように思うのだ。際たる例としては、現代社会は人間としての成熟に目を向けさせるというよりも、金銭の獲得に目を向けさせることが挙げられる。

あるいは、金銭の獲得に有益な小手先の技術を習得させることや単なる情報収集を奨励するような風潮がある。そうした風潮は、私たちが発達課題と真に向き合うことを良しとしないのだ。発達課題と向き合う暇があれば、金銭獲得競争に励むことを良しとするような精神がそこにある。このような精神に毒されている限り、真の人格的成熟は成し遂げられないように思う。

こうした精神風土がさらに問題となるのは、発達課題というものの本質を巧妙に隠蔽しているということである。言い換えると、発達課題という、乗り越えていくことが極めて困難な現象を骨抜きにし、課題の克服が容易であるかのような錯覚を私たちに与えているのである。

その結果として、金銭の獲得がゲーム化されている状況のみならず、発達に関しても高次の段階を獲得することがゲーム化されてしまうような状況を生み出しているように思うのだ。発達段階を獲得するゲームの世界では、発達課題は乗り越えることが容易であるかのような印象を私たちに与える。

つまり、ここでは発達課題が本質的にもつ髄が骨抜きにされているのだ。本来、発達課題とは、今の段階の自分では到底手に負えない類のものなのである。私たちが発達ゲームの中にいる場合、往々にして、発達は喜びの感情と対をなしている。

© YOHEI KATO 2017

一方、私たちが真に発達プロセスの中を生きている場合、それは苦渋に満ちたものであるはずだ。なぜなら、次の発達課題というのは全くもって今の自分には手に負えないものであり、私たちは絶えずそうした課題と向き合うことを宿命づけられているからである。

私たちは一つの課題を克服したと思った瞬間に、新たな課題を背負わされることを宿命づけられた存在である。課題の克服とさらに困難な課題の出現が、一体となって無限に続く様を目撃すると、常人であれば喜びの感情など起こらないはずである。

課題の克服によって喜びを感じているのであれば、それは新たな課題を見過ごしていることになり、真の発達プロセスを生きておらず、発達ゲームの中で生きていることを示唆するものだろう。仮に喜びの感情の先にある苦渋さを感じることができたら、それは真の発達プロセスを健全に歩んでいることの証かもしれない。こうした苦渋に満ちた感情は往々にして、自分の発達課題と真に向き合った時に生じる特別なものなのである。

ふと手を止めてみると、先ほどの激しい雨が止んでいるのに気づいた。書斎の窓から空を眺めてみると、激しい雨を降らせた雨雲が東の空に広がっており、西の空には晴れ渡る空が広がっていた。そして、二つの中間の空に浮かぶちぎれ雲が、夕焼けに照らされて赤く光っていた。

ここで私は、対称性の中にあるどちらの極にも属さない存在を見つけることができたのだった。東の空と西の空の中間に位置するちぎれ雲は、中庸の精神の化身であった。

469. 深海と個の発見

起床してから日が昇るまでの時間が日増しに遅くなっている。今日は朝の五時に起床し、日が昇り始めたのは八時前であった。日が昇ったのを確認すると、「タレントディベロップメントと創造性の発達」のクラスに参加をするために支度をした。

九時前に家を出てみると、辺りはまだ眠っているかのように鬱蒼とした雰囲気を放っていた。外気もかなり低くなってきており、来週か再来週には冬用の厚手のコートを着て外出しなければならないかもしれない。

今日の朝はとても否定的な印象を私に与えた。常に自分の感情を最善の状態に保つことは不可能であり、今日は感情の波が下に落ちている日に該当していたようである。ひどく抑鬱的な気持ちを抱えたまま教室に到着し、結局クラスが終了してもその気分が晴れることはなかった。

そうしたこともあって、今日のクラスでは初めて自分が何も発言しないということが起こった。人間の精神生活に感情が与える影響は極めて大きく、感情を超越して生きることはできないのだろうと思わされた。

カート・フィッシャーが指摘しているように、やはり私たちの感情は、認知と行動を駆動させる不可欠な潤滑油なのだ。この潤滑油が欠けている場合、認知と行動がうまく回っていくことはない。

それにしても、こうした抑鬱的な感情の正体がまだなかなか掴めていない。私にとってこうした感情は、母国を離れて生活を送っている時に周期的に現れるものである。この感情が持つ性質は独特であり、自分の内側へ内側へと向かわせる強力な力を兼ね備えているのだ。

知覚も非常に鋭敏になっており、世界の認識の仕方が通常時の自分とは少し異なることもわかっている。これは、自己の内側へ内側へと思考を導いていくのには適している感情状態なのだが、人とコミュニケーションを図ることには適していない感情である。

実際に、今日のクラスの中で何人かの知人と顔を合わせる瞬間があり、普段であれば必ず何かしらの質問を投げかけるのだが、今日は相手の質問に一言だけ答えることによって、コミュニケーションを切断しようとする自分がいたのは確かである。

クラスが終わり、帰路につく最中もほぼ同様の感情状態にあった。内側へ内側へ潜っていくことを促す力に抗うことはできず、足元の近くを見ながら、何を考えるのでもなく、自分の内側の奥深くに留まり続けていた。

自宅に到着すると、家の内側も外側も奇妙なほどに静かであった。こうした感情状態を抑鬱的と捉えていたが、感覚的には深海の地底にいるような状態であると言ったほうがいいかもしれない。

© YOHEI KATO 2017

表層の海面がいかに波風の立っているものであったとしても、深海の地底は絵も言わぬ静けさに包まれていると想像している。あの不気味なほどに暗く静かな深海のように、今の自分の内側も静かである。

穏やかな深海に他者を招き入れることができないのは残念であるが、自分の内側にあるこうした深海の発見こそが、一人の個としての真なる自覚の始まりなのかもしれない。

帰宅後しばらくすると、鬱蒼と群がっていた薄い雲が徐々に消えていき、太陽が顔を覗かせた。今の自分には晴れた空は不必要であったため、太陽の存在に有り難さを感じることができなかった。しかしながら、太陽によって、深海の地底が少し温められたのは紛れもない事実であった。

突然の思いつきで、書斎の机の位置を変えることにした。書斎にある開放的な大きな窓に対面する形で机を置き直したのだ。机越しに見える窓を通じて、私はただただ遠くだけを見つめていた。
2016/10/19

470. 専門家の見立ての頼りなさについて

今日は「タレントディベロップメントと創造性の発達」の第六回目のクラスに参加してきた。このコースもいよいよ来週で最後であり、再来週には最終試験が控えている。今日のテーマは「才能と創造性の測定・評価」だった。

一年目の最後のコースとして「タレントアセスメント」を履修しようと計画しており、そのコースと同様に、今日のクラスはスーザン・ニーセン先生が担当した。大きなトピックは、プロフェッショナルジャッジメントと数理的ジャッジメントの比較であり、今日のクラスの内容から色々と考えさせられることがあった。

プロフェッショナルジャッジメントというのは、専門家がこれまでの自分の知識や経験に基づいて、クライアントの診断・評価を主観的に行うことを指す。一方、数理的ジャッジメントというのは、何らかの科学的な測定手法に基づいて、クライアントの診断・評価を客観的に行うことを指す。

専門家であれば領域を問わず、日々の実践の中でプロフェッショナルジャッジメントを多々行っていると思う。例えば、コーチであればクライアントの思考特性の評価、サイコセラピストであれば精神病理の診断、経営コンサルタントであれば経営上の問題の発見、教師であれば学習進度の評価など、様々なものが考えられる。

一言で述べると、今日のクラスのポイントは、そうしたプロフェッショナルジャッジメントがいかに不正確かを理解することにあった。もちろん、専門家の知識や経験が増せば増すほど、その領域に関する直感力のようなものが磨かれるのは間違いない。

だが、近年の研究は、こうした直感力が実に頼りのないものであることを暴き出しているのも事実なのだ。どちらかというと、私は人間が持つ直感力などの潜在能力を擁護する立場を採用しているため、今日のクラスを通じて、専門家の直感というのは診断や評価に関していかに頼りのないものかを示す調査結果をいくつも見て、少しばかり愕然とした。

あえて直感力を強固に擁護する論陣を張ってみても、今日のクラスの内容や課題論文に掲載されている実証結果によって、それらはことごとく却下されていったのだ。私たち人間にはどうも自分の力を過信するような傾向があり、専門家ともなればなおさらそうした過信が強まるであろうから、直感の用い方には細心の注意を払うべきだと思った。

さらに興味深い指摘が課題論文の中に記載されていた。それは、プロフェッショナルジャッジメントと数理的ジャッジメントを組み合わせてもほとんど効果がないということである。これは私の直感に反した実証結果であった――ここでも自分の直感が覆されているという確かな事実がある。

“Clinical versus actuarial judgment (1989)”という論文を読み進めながら、数理的ジャッジメントがプロフェッショナルジャッジメントに勝るとしても、専門家の固有の直感力も見捨てがたいため、それらの折衷型のアプローチが良いだろうと仮説を立てていたのだ。

しかしながら、論文の後半には、折衷型はうまく機能しないという実証結果が提示されていた。こうしたことがなぜ起こり得るのかというと、大きな理由として、両者の折衷型を採用している場合、客観的なアセスメントを取り入れたとしても、アセスメントの結果が自分の意図に反している場合には、意識的・無意識的にその結果を無視して自分の主観的な判断に頼ってしまうことが挙げられるだろう。

© YOHEI KATO 2017

アセスメントの結果を自分の都合の良いように取り扱うというのは、プロフェッショナル倫理に抵触していると思うのだが、実際には相当に優れた内省的判断力と倫理力を備えていなければ、ついつい自分の経験に頼った判断をしてしまいがちなのではないかと思う。

この論文は、専門家という人間が内在的に抱えている盲点を見事に指摘している点において価値があると思った。そういえば以前、米国における死亡要因の第三位に医師の誤診がランクインしているデータを見かけたことがある。

おそらく医師は通常、プロフェッショナルジャッジメントと数理的ジャッジメントの折衷的なアプローチを採用して仕事に携わっているのだと思う。しかしながら、このデータが示しているように、こうした折衷型のアプローチは、多くの誤診を生み出す一つの要因になっている気がしている。

専門家がついつい自分の経験に頼った判断を行ってしまいがちなことに付け加えて、私たちの認知能力にも根本的な限界があり、それがプロフェッショナルジャッジメントの質を低下させているようにも思う。

どういうことかというと、確かに専門家は問題に潜む複数の変数を直感的に把握することは得意だと思うのだ。ただし、専門家を含めて人間の知性の限界は、そうした複数の変数を統合して、一つの正確な診断を導けるだけの力がないことである。

ケン・ウィルバーの発達段階モデルでは、高度な知性段階を「統合的段階」と形容しているが、上記の問題が人間心理に根ざしたものであるため、仮にこうした段階にある人間であっても、プロフェッショナルジャッジメントには内在的な問題が必ずつきまとうと考えている。

上記の話題は、専門家にとって耳の痛い話かもしれないが、自分の知識や経験に頼った判断をしがちな専門家は、誤診を通じてクライアントと向き合っている可能性が高いことを認識しておいた方が良さそうである。

© YOHEI KATO 2017

471.促しと探究心

昨日、突然の思いつきで、書斎の机の配置を変えた。机の配置を変えることによって、気分が大きく変わったのを実感している。環境心理学の観点を用いるまでもなく、自室にある物を動かすだけでも、自分の気分が変化したのは疑いようのない事実であった。

環境からの外的刺激に少し変更を加えることによって、自分の感情や思考の性質に変化が生じるというのは面白い現象である。しかし、そうした変化は往々にして一過性のものに過ぎない場合がある。今の私は外側からの刺激を求めていない。

他者や書物からも刺激を求めてはいないのだ。求めているものがあるとすれば、それは促しだろう。刺激と促しは似て非なるものである。刺激というのは、それが外側からもたらされることによって、何からしらの反応を私たちにもたらすだけである。つまり、刺激というのは一過性のものなのだ。

一方、促しは外側からもたらされた後も、内側の中に留まり続け、内側の働きを継続的に推進させる力を持っている。これは極めて大きな違いだと思う。そして、刺激というのもは一過性のものであると同時に、外側から内側を押すような感覚質を伴っている。

一方、促しは外側から内側に入り、内側から外側へ自己を押し広げるような感覚質を伴っていることに気づく。自己の成熟の本質は、内側からの展開であるということを考えると、一過性の刺激をいくら求めても内側の成熟は起こらないのだ。

真に自己を深めていくためには、永続性のある内的促しが不可欠になる。そのように考えると、今の私は、仮に刺激が偶然もたらされることはあっても、意識的にそれを求めるようなことはないことに気づく。自分が求めているのは内側の自己展開を呼び起こす促しなのだ。

だが、促しを真にもたらしてくれるものがこの世界にいかに少ないことか。あるいは、促しを装った偽物と偽者でいかにこの世界が埋め尽くされていることかを思い知らされる。真に促しをもたらす他者や書物とニセモノを見分ける感覚が、自分の中に少しずつ身についてきたように思う。

© YOHEI KATO 2017

促しというある意味、外から内へのベクトルと内から外へのベクトルを同時に持つ現象の他に、純粋に内から外へと向かう、止むに止まれぬ探究心についても思いを巡らせていた。渡欧する直前、天体物理学に関する書籍や雑誌を集中的に読み込んでいた時期があり、外面的宇宙の仕組みにも関心があることは確かだが、それ以上に、私はやはり内面宇宙の仕組みに関心があることを偽ることができなかった。

それは隠しようのない衝動であり、ごまかしようのない感情である。それは取り繕うことのできない怒涛のような流れである。自分の内側から外へと流れ出る止むに止まれぬ衝動の起源をぼんやりと頭の片隅に入れながら、パーソナリティに関する辞典のような存在である “An introduction theories of personality (1998)”に目を通していた。

何気なく本書を紐解いていると、偶然ながらアルフレッド・アドラーの章が今の自分に必要と言わんばかりに目に飛び込んできた。日本ではアドラーが一時期相当なブームになったということを知っていたが、私はこれまでアドラーの書籍を読んだことはほとんどない。

事前知識がほとんどない状態でアドラーを読んでみると、様々な発見があった。その中でも、「私たちは幼少期に生み出した劣等感を克服する試みに従事するように迫られている」というアドラーの指摘は見逃すことのできない真理を含んでいるように思えた。

というのも、私の中にある内から外へと向かう止むに止まれぬ探究心というのは、間違いなく自分の劣等感と密接につながっており、それは幼少期に形成されたものであると思っていたからである。正直なところ、単に純粋な探究心という言葉では、説明することができないような複雑な塊のようなものが内側にゴロゴロしていることを感じていた。

その塊は一つ一つが火山のようなものであり、純粋な探究心からは生み出されないようなドロドロとした激しさや力強さを持っているのを感じるのだ。そうしたことからも、私は純粋な探究心と劣等感から生み出された複雑な探究心の双方を持って、日々の仕事に打ち込んでいるように思えるのだ。

さらにそこには、アドラーが提唱する「虚構的目的論（fictional finalism）」の要素も絡んでいることに気づく。これは、到達しえない目標に向かって、自己が突き動かされていることを示す概念である。

昨年、日本に滞在する中で、自分が超越的な目標物に向かって歩みを始めたのを止めることができなかった、という経験をした。

仮にそうした目標物が虚構であったとしても、そこへ向かっていく形を取らなければ、今の自分は生きられないようなのだ。

472.何気ない日常から

今日は午前中から夕方にかけて、研究プロジェクトを進めていた。次回のクネン先生とのミーティングに向けて、定量データをカテゴリー化する案をいくつか考えておきたいと思う。同時に、論文提案書も前回の指摘をもとに修正を加えておきたい。

明日がいよいよオランダ語の初級コースの最後のクラスとなる。おそらく先日の最終試験の答案が返却され、それに対する見直しを全員で行うことになるのだろう。最後のクラスであるにもかかわらず、明日はクラスを途中で抜けなければならない。

というのも、明日は午前十時からロッテルダム大学とフローニンゲン大学が共催の学会に参加するからである。明日の学会が終わった後に、そこでの体験を書き残しておきたいと思う。

研究プロジェクト以外では、今日は比較的多くの時間をパーソナリティに関する専門書を読むことに費やしていたように思う。これまで見落としていた概念や理論が無数に存在していることに気づき、また、これまで馴染みのある心理学者がパーソナリティに関して優れた考え方を持っていたことに改めて色々と気づかされた。このあたりに関しても、後日、一つ一つの発見事項を文章にしておきたいと思う。

昨日の抑鬱的な感情はどこかに過ぎ去っていることにふと気づいた。だが、それは表面的な症状が消えただけであって、根本的な原因の解決には至っていない。昨日の精神状態を振り返ってみると、それは精神エネルギーの減退を示しているわけではなかった。

エネルギーの出所やその表現の仕方が通常とは異なっていただけなのである。医療の世界においても、症状を抑えることはできても、なかなか症状の原因を根本的に治癒することが難しいのと同様に、この原因を特定し、それを解決の方向に導くのはなかなか難しいと思っている。

昨日のあのような感覚に見舞われたせいか、今日は内面世界にうまく入り込んでいけない感じがしている。昨日は、まさに内へ内へと促す強力な力によって、自分が内面世界の奥底に降りていくような感覚があった。

しかし翻って今日は、深海のような領域はおろか、内面世界の表層にすら入っていけない状態に陥っているのがわかる。深海から外界にはじき出された深海魚のような心境である。このような日は、無理に内側の世界を覗き込まないようにすることが賢明なように思われる。

空を行き交う浮雲のように、今日は内面世界の表層の上をただ漂っているだけに留めておこうと思う。今の自分に、それ以上のことは不可能だ。

再来週に迫った「タレントディベロップメントと創造性の発達」のコースの最終試験に向けて、本格的に復習を始めようと思う。この試験がオープンクエスチョン形式であることは実に有り難い。

最近、米国の大学院で経験したような期末ペーパーを課せられるよりも、記述形式でクラスの内容を確認させられる試験の方が今の自分にとっては好都合だと考えている。とかく確固とした知識体系を構築したい今の自分にとっては、単に自分の関心事項に沿って期末ペーパーを書き上げるよりも、コースで学習した概念や理論を網羅的に復習せざるをえない状況に追い込むこのような形式の試験の方が有り難いのである。来週は、特に時間をかけてコースの総復習を行う必要があるだろう。

473.発達的大変動

昨日は、一昨日の精神状態を受けてほとんど文章を書くことができなかった。言葉にできるものや言葉にすべきものが内側から湧き上がってこなかったのだ。自分の内面世界でこのようなことが起こり得るということを知れたのは新たな発見であった。

昨日から一夜明けた今日は、かなり爽快な気分であった。奇しくも今日は自分の誕生日であり、それと何かしらの相関関係があるのかもしれない。もちろん、それは科学的な相関関係ではなく、形而上学的な相関関係である。

今日は書き残しておきたい事柄が多岐にわたっており、なおかつ言葉が自発的に湧き上がってくる状態にあるため、どの順番で何を書き、どのような側面に焦点を当てて、どれだけ深く一つの出来事を書き記しておくべきか悩むところである。とりあえず、時系列的に出来事を振り返り、その出来事の中で自分が考えたことや感じたことを書き留めておくことにする。

今日は早朝の起床と同時に、自分の精神状態が極めて良好であることにすぐに気づいた。昨夜は、夢のない深い眠りの状態が長く続き、そこから覚醒的な自己が新たに生まれ出てきた感触があった。

それはさながら、自分が何かから脱皮したような感触であった。「脱皮」という喩えは、自分の感覚とかなり合致している。抑鬱的な精神状態は、海外で生活する中で定期的にやってくるものであったとしても、一昨日のような自己の内側へ深く深く潜らせるような種類の精神状態は、これまで滅多に経験したことがないものであったと思う。

「抑鬱的」という言葉を用いると、否定的な含意があるように思えるかもしれないが、私の中では一昨日の経験はかなり肯定的なものであった。というのも、あの精神状態はまさに、自分の内面世界にある深海に気づかせてくれるものであったし、深海の中にある自己のあり様やあり方を示してくれるものであったからだ。

また、こうした深海に到達することの難しさを痛感したのと同時に、深海から再び水面上に浮上して外界を眺めると、以前とは景色が少しばかり異なっていることにも気づいた。この深海には、私たちの自己の本質を示す何かが隠されているように思う。

実際に昨日は、自分の言語機能がうまく働かない状態であったことからも、内面世界の深海は言語を寄せ付けない領域であるかのように思わされた。そして皮肉かつ興味深いのは、深海は言語を寄せ付けないという特徴を持ちながら、一方では、それを見た者に言語でその世界に迫っていくことを促すような働きかけをしてくるのだ。そのような体験をしたのが、一昨日と昨日であった。

© YOHEI KATO 2017

このような体験が自分の誕生日の直前に起こったことは何かの縁だろうか。深海から再び外側の世界に戻ってきた今日は、これまでとは少し違う世界が眼前に広がっていた。誕生日というのは、新たに年をひとつ重ねることではなく、もしかしたらそれは、周期的に私たちに生まれ変わることを促すような節目なのかもしれない。

確かに社会的には、私は一つ年を重ねることになったが、自分の内面世界では、新たな自己が生まれ出てくることを実感していたのだ。そこには何かを重ねる感覚というよりも、何かからの脱皮の感覚があり、内側から何かを開かせる感覚があったのだ。

ある発達段階から次の発達段階へ到達するには、確かに多くのものを積み重ねていく必要がある。そして往々にして、次の段階へ到達する直前には大きな壁が立ちはだかっており、大きな跳躍を私たちに要求してくる。

跳躍の一瞬前の状態は、未知なる世界へ飛び込んでいく感覚に等しく、それゆえに精神的にも大きな負荷がかかっている。ダイナミックシステム理論――特にその中にある「カタストロフィ理論」――では、発達プロセスの中に見られる大きな変動現象を「カタストロフィ」と表現することがある。

カタストロフィの元々の意味は、「大変動」や「大きな破滅」である。カタストロフィという言葉が私たちに示すように、発達プロセスの中でそのような大変動が起こる時、それは私たちにとって大きな衝撃を与える。

そして興味深いのは、そうした大変動が起こる直前には、予兆のようなものが見られるのだ。「予兆」と表現したが、実際にはこれは非常に捉えにくい現象である。それを掴む感覚の微細さは、地震を予兆する感覚と似ているかもしれない。

今回私がそのような予兆を感じることができたのは、偶然だったのかもしれない。いずれにせよ、内面世界の地殻に亀裂が入り、その亀裂の中に沈みこんでいく感覚がしたのは確かである。

その感覚は圧迫的であり、重々しいものであったが、こうした予兆と感覚は、発達の直前に起こる現象なのだと体験的に了解した。最後に書き留めておきたいのは、今回の発達現象はマクロなレベルでのものではなく、ミクロかせいぜいメソなレベルでの発達現象であったということだ。

© YOHEI KATO 2017

確かに、何かからの脱皮を果たしたのはわかったが、それは世界観が一変してしまうほどのものではなく、マクロなレベルでの発達と位置付けることはできない。2016/10/21

474. 言葉の深層世界に飲み込まれて

本日、無事にオランダ語の初級コースを終えた。案の定、先日受けた最終試験の結果が返ってきた。英語で言う倒置構文に関して、作り方を間違って記憶しており、その箇所はもう一度見直しておく必要があるだろう。

答案の返却と同時に、このコースの修了証書を授与された。一ヶ月前の自分と比較してみると、オランダ語に関して大きな進歩が自分に見られるのは喜ばしいことである。だが、正直なところ、なぜオランダ語を学習しているのか自分でも定かではないことがある。

時折、普遍語である英語や母国語の日本語をより開拓していくべきなのではないか、という思いがむくむくと湧き上がってくるのだが、なぜだかオランダ語を少しずつでもいいので、学び続けていこうという思いがあるのだ。

確かに、私はオランダ語で構築された精神空間を尊重しているのだが、そうした尊重の思いが自分の学習を継続させている最大の要因ではないことを知っている。やはりそこには、異なる言語を習得することによってしか開けない多様な自己の側面を捉えたい、という想いがあるように思う。

他言語を学習してみると、人間の内面世界が持つ未知なる領域の広さと深さにただただ驚かされるばかりである。内面世界の様子はさながら、言語の種類によって、異なる種類の内面領域が開かれ、それらの言語の習熟度合いによって、異なる深さの内面領域が立ち現われてくるというような絵になっている。

そして、言語学者のノーム・チョムスキーが指摘したような普遍文法と少し似ているかもしれないが、私たちの言語世界の底は共通しているような印象を私は持っている。これは言語を習得する能力について述べているわけではなく、言葉を生み出す空間がどこかで繋がっているというようなニュアンスである。

もしかすると、これが井筒俊彦先生が述べていた「言語アラヤ識」と呼ばれるものの正体なのかもしれない。これは米国で生活を始めた時の感覚に似ているが、オランダ語を学べば学ぶほど、学習プロセスのどこかで必ず、覚醒状態のまま無意識の世界の奥底に投げ込まれるような体験をすることがある。

数年前の私であれば、この現象を単に「言語感覚の麻痺」と認識していたのだが、最近そのような言葉を当てることは正しくないと考えるようになった。言語感覚が麻痺をしているために、言葉を極度に客体化させているのではなく、言葉を生み出す基底部分と自分が接触しているがゆえに、生成されてくる全ての言葉を眺めているような不思議な感覚に見舞われていたのだ、と了解した。

初めてこの体験をした時は、言葉を生み出す舵を自分が握っているのではなく、言語空間の基底部分に握られていたため、覚醒状態であるにもかかわらず、自分で自覚的に言葉を生み出すことができないことにひどく当惑をしていた。

つまり、この状態下においては、自らの言葉をもってして自己を規定できないということを意味しており、自分がこの世界に存在しているのか定かではなく、自分が一体何者かを把握できないような感覚に包み込まれるのだ。

しかしながら、仮に自分が言語空間の基底部分に接触しており、言葉を生み出す舵を手放しているのであれば、その感覚は非常に合点がいくのである。ただし、依然として一つ謎が残っている。それは、母国語のみを学習していてもこのような感覚は得られないということである。

また、他の外国語を学んでも、それがある程度の習熟度合いに達すると、そうした感覚に見舞われないということだ。実際にこれまでの経験上、日本語を学習している過程の中で、このような感覚に見舞われたことはない。

さらに、英語がある程度の習熟度合いに達してからは、そのような感覚が訪れたこともない。どうやら、母国語以外の新たな言語を学ぶ過程で、言語空間の最も深層にある原初的な世界に投げ込まれるようなことが起こるのではないか、と考えている。

© YOHEI KATO 2017

こうした経験は、意味を生成する言葉の深層世界に触れることと同じであるため、意味を生成する主体に少なからず大きな影響を及ぼすのである。正直なところ、言葉の深層世界は安易に覗き込むべきものではないと思っている。

なぜならそれは、自己の存在を決定的に左右する言葉の真理に触れることを意味し、これまで自分が自己だと思っていた存在が雪崩のように瓦解し、紙吹雪のように吹き飛ばされるような感覚を必ず伴うからである。

こうしたことに考えを巡らせてみて、ハッと気づいたのは、一昨日の抑鬱状態は言語の深層世界との接触を意味していたのではないか、ということである。あのように自分が内へ内へと深く巻き込まれていく感覚は、振り返ってみると、五年前に経験した感覚と似ているものがあることに今気づいたのだ。

ここから、私にとってオランダ語を学ぶ意義は、言葉の深層世界を覗き込むことでもそれに触れることでもなく、その性質を自分なりに掴むことにあるのかもしれないと考えた。もちろん、そうした性質を掴むためには、否応なしに言葉の深層世界を覗き込み、それに触れることを余儀なくされるのだが・・・。

475. 同志

今日は最後のオランダ語のクラスを途中で退席し、フローニンゲン大学とロッテルダム大学が共催する学術会議に参加した。この会議は、「人財の評価と選定」を専門とする研究者がお互いの研究成果を報告し、意見交換することを目的とされたものである。

今回の会議は第11回目とのことであり、場所はフローニゲンの中心部で開催された。この会議はそれほど規模が大きいものではなく、オランダ国内の中で「人財の評価と選定」を専門としている研究者だけが参加するものであり、参加者の人数は20名ほどであった。

ほぼ全ての参加者が経験豊富な教授陣であり、発表を担当した者の中には博士課程の学生が少数いたが、私のように修士課程に在籍している者はほとんどいなかった。今回の会議に関する告知は、一応「タレントディベロップメントと創造性の発達」プログラムに属する修士課程の学生に行き届

いていたのだが、実際に参加したのは、同じプログラムに所属するオランダ人のエスターと私しかいなかった。

会議の内容に触れる前に、エスターについて触れなければならない。彼女はフローニンゲン生まれのフローニンゲン育ちということで、生粋のフローニンゲン人と評して問題はないだろう。実は、エスターとはこれまで一度も会話をしたことがなく、プログラムの歓迎ランチの際に、別のテーブルに座っているのを見た記憶があるぐらいの関係であった。

しかし、今日の会議の主催者から、もう一人修士課程の学生がいる、ということを聞いており、会議室に入るところでエスターと偶然顔を合わせることになり、そこでお互いについて色々と話すことになったのだ。

二言三言、エスターと言葉を交換してみてすぐに気づいたのは、彼女が極めて特殊な色と形を持った言語世界を作っていることであった。そうしたことから彼女の学術的バックグラウンドについて尋ねてみると、最近まで「天体物理学（astrophysics）」を専門としていたようなのだ。

これを聞いた時、私は大変嬉しくなった。というのも、昨年のある時期に、集中的に天体物理学に関する書籍や雑誌に目を通していたことがあり、この分野には前々から興味があったのである。

自分の専門とする内面宇宙とは対極にある外面宇宙について、なぜだか強い関心を一時的に示す自分がいたのだ。私が数字や法律という客観的外面世界から主観的内面世界の探究に方向転換したのと同様に、エスターも外面的物理宇宙から内面世界に方向転換したことを知り、強い親近感を持った。

また、エスターが哲学者とは違う切れ味で言葉を操ることにも関心を持った。そして何より、最も意気投合したのは、彼女もダイナミックシステムアプローチに強い関心を持っているということだった。

確かに、応用数学のダイナミックシステムアプローチは、天体物理学の世界では非常に馴染みのあるものであり、彼女がこの手法に関心を持っていることはあまり驚くに値しないのかもしれない。

© YOHEI KATO 2017

しかしながら、ダイナミックシステムアプローチを外面宇宙ではなく、内面宇宙のプロセスやメカニズムを解明することに適用しようとする同世代の同僚が皆無であったため、エスターが目の前に現れたことは、私にとって非常に喜ばしかったのだ。

学術探究に関して意気投合したのは、哲学科に所属するキューバ人のシーサー以来、二人目のことである。シーサーが関心を持つ認識論や言語哲学は、確かに私の関心領域でもあるが、それは私の仕事と直接的に関係しているわけではないため、エスターとの出会いは私にとって大きな意味を持っている。

偶然の一致であるが、発達科学の世界にダイナミックシステムアプローチを普及させる先駆的役割を果たした、元インディアナ大学教授エスター・セレンと同じ名前を彼女が持っていることにも気づいた。おそらく、天体物理学を専攻していたエスターの方が、ダイナミックシステムアプローチに関する技術的（数学的）な側面に習熟していると思われるので、近いうちに改めて話をしてみたいと思う。

476. FCフローニンゲンの日本人選手獲得の可能性

一夜明け、昨日の「人財の評価と選定」に関する学術会議を改めて振り返っておきたい。私が最も関心を惹かれたのは、最初のプレゼンターの研究発表であった。

テーマは、フローニンゲンの地元のプロサッカーチームであるFCフローニンゲンが、どのように人財の評価と選定を行っているのかについてである。発表の担当者は、フローニンゲン大学でスポーツ科学に関する博士号を取得しているワウター・フレンケンだった。

フレンケンは、FCフローニンゲンに対してスポーツ科学の観点から、選手の育成や評価についてアドバイスを行っているコンサルタントかつ研究者である。彼のプレゼンテーションを聞いていてすぐにわかったのは、FCフローニンゲンが積極的に最先端のスポーツ科学の知見を取り入れている、ということであった。

どうやら五年前ぐらいから、FCフローニンゲンはスポーツ科学の知見を選手の育成や評価に取り入れ始めたようである。ユースチームとトップチームとでは、リクルーティング戦略や方法が異なること

も面白かったし、最先端技術を駆使した特殊なシミレーション装置を用いた練習などもユニークであった。

FCフローニンゲンは、オランダのトップリーグの中では中堅のチームだが、25名ほどの人物がスカウティングを行っており、オランダ国内のみならず、欧州全土にわたって優れた選手を発掘しようとしていることもわかった。発達心理学の観点と通じるところがあったのは、各ポジションごとのタスクを明確に言語化し、そうしたタスクを遂行できる選手を戦略的にリクルートしようとするやり方である。

スカウティングを行う者が、ある種の共通言語を持つことによって、チームが理想とする選手を的確に獲得しようとする意図が伝わってきた。FCフローニンゲンは、フローニンゲン大学のスポーツ科学学科や心理学科と共同することによって、単にチームの成績向上のみを目的とするのではなく、選手がプロサッカー選手として生きていく上での環境作りをしっかりと行うことを志しているチームなのだということが伝わってきた。

しかし残念ながら、こうした科学的な試みもまだチームとしての結果にはつながっていないようだった。プレゼンターのフレンケンも苦笑いを述べながら紹介していたが、今季のFCフローニンゲンは、ホームでの5戦を3敗2分けというお世辞にも良い成績とは言えない数字を残している。

おそらく近年では、トップチームのほとんどがスポーツ科学の知見を導入しているため、こうした知見を導入していないチームは遅れをとることになると思うが、導入しているチーム間においては、また別のところで差が生まれてくるのだろうと思う。最先端のスポーツ科学に基づいた非常にユニークな育成手法や選抜手法があれば、また話は少し変わってくると思うので、各チームごとの育成手法や選抜手法の比較について関心を持った。

最後に、もちろんFCフローニンゲンはオランダのクラブであるから、オランダ人の選手を獲得・育成に主眼を当てるのは、ある意味、当然と言えば当然である。ただし私の中では、アヤックスやPSVやフェイエノールトのようなオランダの強豪クラブは、他国からも優秀な選手を獲得し、多様性が確保されたチームである、というイメージがあった。

FCフローニンゲンが中堅クラブであり、財政的にも強豪クラブと差があるのかもしれないが、スカウンティング網を他国に伸ばしているにもかかわらず、それほど他の国の選手がいないことが気になっ

ていた。そのため、発表者のフレンケンにFCフローニンゲンのダイバーシティ戦略のようなものがあるのかどうか質問をしてみた。

フレンケン曰く、クラブとして明確なポリシーはないとのことであった。私は、オランダリーグは日本人選手が活躍し、その後に欧州の他のトップリーグに行く上では素晴らしい場所なのではないかと前から思っていた。なぜなら、リーグのレベルが高すぎるわけでも低すぎるわけでもなく、国の文化としても日本人は比較的順応しやすいのではないかと思っていたからだ。

そうした思いから、FCフローニンゲンのリクルーティングに関してもアドバイスをしているフレンケンに対して、日本人選手の獲得について検討するようにお願いをした。この提案には会場からも笑いが起こっていたが、技術的に非常に優れた若い日本人選手の中で、将来ヨーロッパのトップリーグで活躍することを志す選手が増えてきていることは確かだろう。

そのため、私の中ではFCフローニンゲンに対して真剣に検討してもらいたい案であった。フレンケン曰く、過去に韓国人の選手が活躍し、実際に他のビッグチームに移籍したという成功例があるようだ。

オランダ語さえ話せれば、日本人選手にも門戸が広く開かれているということなので、オランダ語の壁は決して低くはないかもしれないが、日本人選手がオランダリーグを真剣に検討するのも悪くないのではないかと思う。

477. 無数の言語ゲーム

昨日の学術会議に参加した経緯をよくよく振り返ってみると、この会議の趣旨をそれほど理解せぬまま参加を決意したように思う。実際のところ、この会議の趣旨や参加者の専門性を理解したのは、会議が始まってしばらくしてからであった。

特に参加者の専門性を理解し始めたのは、会議の経過に応じて、そこで展開されている言語ゲームがかなり特殊なものであると気づいた時であった。私たちは普段生活をする中で、実は文脈に応じた様々な言語体系を駆使している。

ヴィトゲンシュタインが提唱した「言語ゲーム」という言葉をなぜ用いたのかというと、やはり昨日の会議の中では、ある特殊な言語体系のルールに基づいて、発表や質疑応答が展開されていたからである。分野の異なる専門家が、往々にしてお互いの議論がかみ合わなくなるのは、双方が立脚する言語ゲームが異なり、そのルールが異なることに一つの理由があるように思う。

語彙体系が異なるだけではなく、言葉を生み出すルールそのものが違うというのは、コミュニケーション上の新たなハードルを生み出してしまうことになる。私は幸か不幸か、関心領域が多岐に渡っているため、これまでも自分の専門領域以外の場に積極的に参加していたように思う。

そうした経験を通じて、確かに様々な言語体系に触れ、特殊なルールを持つ様々なゲームに参加してきたことは確かである。しかし、そうした経験をいくら積んでみたところで、常日頃からそのゲームに親しんでいる人と深く対話を行うのはなかなか難しいものである。

一方で、領域固有の言語体系があるのは間違いないのだが、昨日の会議を通じて、領域全般型の言語体系の存在可能性についても垣間見ることができたのは大きな収穫であった。ここで言う領域全般型の言語体系というのは、仮説の検証の仕方であったり、データ収集の方法や分析の仕方など、あらゆる学術研究のプロセスに通底するお作法のようなものである。

こうした手続きやルールは、どのような分野の科学研究にも当てはまるものであり、それらに則って対話を行えば、両者にとって意義のある対話が成立する可能性を見て取ることができたのだ。ここから改めて、自分の課題が浮き彫りになってきた。

まずは、自分の専門分野の言語体系に習熟していくことが何よりも重要である。研究者としての一つの大きな役割は、自分の専門分野に対して新たな知見を加えていくことにあるが、当該領域の言語体系を習得してないと、新たな知見を加えていくことは極めて難しいのだ。

そのため、私の場合は、発達科学と複雑性科学の言語体系を確固としたものにしていく必要があるだろう。もう一つの課題は、こうした領域固有型の言語体系を身につけていくだけではなく、領域全般型の言語体系も同時に確立していくことにある。

フローニンゲン大学の入学の際に要求された統計学のレベルをクリアしたとはいえ、それは最低限のレベルをクリアしたことしか意味しておらず、議論の中で統計学の込み入った話になると、自分の言語体系が追いつかなくなることが頻繁にある。

統計学の言語もオランダ語と同じで、ある種の言葉の体系であることに変わりはないため、焦らず着実に統計学の言語体系に親しんでいく必要があるだろう。統計学の言語体系は、定量的なアプローチが絡む研究を行う際にも、そうした論文を読む際にも、必須のものとなる。毎日が他言語との格闘の日々である。

478. 圧倒からの弾み

目の前にそびえ立つ壁が途轍もなく高い。ポール・ヴァン・ギアートの “Annals of theoretical psychology vol. 7. (1991)”を読みながら、ただただそのようなことしか思わなかった。

この二ヶ月間において、一日たりとも休息を取らなかったことが影響しているのか、先日の感情状態から抜け出せていない。やはりまだ心身ともに理想な状態にあるとは言えないのかもしれない。

二ヶ月間休むことなしに働いていたことに、今日の夕食後にふと気づいたのだ。自分の心身が最善の状態にないことを差し引いたとしても、ポール・ヴァン・ギアートが発達科学の領域に残した数々の仕事にはただただ圧倒されるばかりである。

彼の仕事の質と量は、分野は違えど、モーツァルトやピカソのそれと匹敵するのではないかと思わされる。彼の仕事を辿れば辿るほど、どのようにすればこのような質と量が担保された仕事を長きにわたって行うことができるのか、謎が深まるばかりである。

自分が発達科学の世界に貢献する日などやってくるのか非常に危ぶまれる。また、ヴァン・ギアートの仕事は、私が研究者としてのスタート地点にすら辿り着いていないということを大いに突きつけてくれるのだ。

それほどまでに、ヴァン・ギアートが残した業績は偉大であり、同時にそれが生み出した壁は、私の目の前に途轍もなく高くそびえ立っている。休息を一切取らずに歩み続け、少しばかり疲弊してい

ることがわかったこの時期に、このような形で完膚なきまでに打ちのめされる経験ができたことは、もしかすると非常に貴重なことなのかもしれない。

ヴァン・ギアートの論文が掲載されたページから目をそらし、天井を仰ぎみた。ヴァン・ギアートが残した業績は、天井を突き抜けて、天空の彼方先にまで延びているような感覚を私に引き起こした。その業績の偉大さに対して、思わず笑いが込み上げてきた。

確かに、同じ発達科学の世界の中で、元ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーの残した業績も実に優れたものがある。フィッシャーもヴァン・ギアートと同様に、圧倒的な質と量の論文を執筆しており、発達科学の世界に多大な貢献を果たしている。

だが、今回ヴァン・ギアートの仕事に対して感じたものと、フィッシャーの仕事に対して感じたものとの間には、随分と違いがあるように思える。つまり、二人の巨頭の仕事に対して、私は別種の衝撃を受けていたのだ。

簡単に分類すると、フィッシャーのそれは私を激励するようなものであったのに対し、ヴァン・ギアートのそれは私を叩き潰すようなものであった。今回の衝撃から、一つ大きな発見をした。

それは、一つの領域を突き詰めて探究する際に、人生を賭けることと人生を棒に振ることの境目は、実に微妙であるということだ。私には戻るべき場所など最初から無く、退路を断たれた状態で歩みを開始したため、私にできる唯一のことは、ただただ歩き続けることしかない。

この瞬間の偽ることのできない正直な気持ちは、ゆっくりと歩くことすらままならない、というものかもしれない。歩くことすらできない状況の中で、もがき耐え忍びながらでも前へ進もうとするのは人間の性なのだろうか。2016/10/22

479. 表現エネルギーの伝承

昨夜は、フローニンゲン大学教授ポール・ヴァン・ギアートの仕事に激しく圧倒されるということが起こった。一夜明けてみると、自分が随分と落ち着いた状態にあることに気づく。

日曜日の小雨の降る朝、午前八時を迎えようとしているのに、あたりはまだ暗い。窓の外からレンガ造りの家々を眺めると、家の中に明かりが灯っておらず、多くの人たちはまだ寝ているようだ。

あたりの暗さとは対照的に、私の部屋は煌々とした明かりに照らされている。私の内側にも再び明かりが照らされたかのようである。消し去ることのできない灯火を携えて、今日からまた仕事を継続させていこうと思う。

昨夜は、二つの関連した夢を見た。夢の内容は既に忘却の彼方にあるが、この夢のおかげで再び気力を取り戻したのではないか、と思っている。起床直後から、改めてポール・ヴァン・ギアートの仕事について考えていた。

発達科学の世界には、ロバート・キーガンにせよカート・フィッシャーにせよ、多くの巨人がいる。彼らの仕事を眺めていると、必ず自分を圧倒するようなものが含まれていることにすぐに気づく。

しかし、興味深いのは、彼らの全ての仕事が激しく自分を圧倒するかというと、そうでもない。実際には、ごく少数、往々にして一つの論文や書籍が傑出しているのだ。

こうした事実に気づいた時、もしかすると一人の人間は、本当に傑出したものをごくわずかしか生み出せないのではないか、と思うに至ったのだ。これは研究者のみならず、芸術家などの他の表現者にも当てはまるのではないだろうか。

確かに、一流の表現者は優れたものを生涯にわたって多く残すことができるが、本当に突出したものはごくわずかしかないのではないか。少なくとも研究者の場合は、そうした事実が当てはまっているように思う。

そういえば、「タレントディベロップメントと卓越性の発達」のクラスの中での議論を思い出してみると、一人の表現者が真に傑出したものをごくわずかしか生み出せないということだけではなく、それがいつ生み出されるのかも未知である、という話題が上がっていた。

つまり、卓越の境地に至る時期は、表現者ごとに異なり、さらには、卓越の境地の中で本当に優れたものを生み出す時期に関しても、個人差があるということである。ある者は40代の時に、別の者は60代の時に、真に傑出した産物をこの世界に残すことになる、というように。

上記の三人の発達科学者に限って言えば、彼らはともに、30代の後半から40代の前半にかけて、他者を寄せ付けないような仕事を残しているように思う。研究者にとって、傑作を残そうとすることは、一つの重要な動機付けなのかもしれないが、ここにはまた厄介な問題が存在している。

というのも、こうした傑作を残すためには、心身のエネルギーのみならず、魂のエネルギーまで注ぎ込まなければならず、往々にしてそうした傑作がこの世に産み落とされた後は、表現者のエネルギーの絶対量が愕然と減退する傾向にあるのだ。

要するに、一つの大作を生み出すことができてしまったばかりに、その後の仕事のスケールが突如として小さなものになってしまうことが頻繁に見受けられるのである。これは表現者にとって極めて皮肉なことであるが、生命エネルギーに基づいて活動する人間にとって避けようのないことなのかもしれない。

最後に、もう一点ほど書き留めておきたい。昨日の出来事のように、真に傑出した作品は、私たちを打ちのめすような力を必ず持ち合わせているのだが、それに打ちのめされることは、表現者にとって――特に同じ領域で活動する表現者にとって――極めて重要なことなのではないかと思った。

なぜなら、作品に圧倒され、打ちのめされたということは、その作品に充満する表現エネルギーと真にぶつかったことを意味しているからである。つまり、私たちは傑作の中に込められたエネルギーと対峙することによって、そのエネルギーを自己に取り込むことにつながっているのではないか、ということである。

© YOHEI KATO 2017

そう考えると、作品が傑出していればいるほど、その作品と真に対峙した際に、それに打ちのめされ、すぐに立ち直れないということが起こり得るのは非常に納得がいく。表現者としての自分の容量を遥かに凌駕するエネルギーが、自己に注ぎ込まれるのであるから、当然と言えば当然である。

このように、過去の偉大な表現者からエネルギーを享受することによって、新たな時代の表現者は、自分なりの優れた作品を残すことになっていくのではないかと思った。表現エネルギーの伝承は、表現することを宿命づけられた人間にとって不可欠な営みなのだろう。

480. 日常的な非日常的休日

今日は、非常に仕事がはかどった日曜日であった。早朝にオンラインゼミナール用の教材を作成し、研究プロジェクトに向けて文献リストを作成し始めた。ここからは哲学書や専門書から少し離れ、数多くの学術論文を読み込んでいくことになるだろう。

先日の「人財の評価と選定」に関する学術会議で親しくなったエスターと話をしていたところ、彼女は「心理統計に関するメタ分析」をテーマとした研究を行っているらしい。もともと彼女の専攻は天体物理学であるから、数式が多数絡んでくる統計処理にも問題はほとんどないと思うのだが、今回は理論的な研究をすることにしたそうだ。

何やら少なくても500本の論文に目を通す必要がある、ということを述べていた。これは相当な数である。エスターとの対話によって、私も本腰を入れて参考文献に目を通しておこうと思うようになった。

すでに研究の骨子は決まっており、どのような論文を引用するかの大まかな目処も立っていたため、この辺で参考文献を読み始めるのも悪くないと思う。研究の初期の段階で文献調査の比重を大きくしてしまうと、結局何も動き出さないことが起こり得ると思っていたため、これまでは自分の研究に関係する文献を精密に読むことを避けていた。だが、そろそろこうした作業に取り掛かってもいい頃だと思う。

午前中の仕事を終え、昼食前にノーダープラントソン公園にランニングに出かけた。今日が晴天であれば、先日のランニングで発見したお洒落な家々が立ち並ぶコースを選んだのだが、今日はあ

いにくの曇り空であったのと、自然の空気を存分に吸いたいという気分であったため、ノーダープラントソン公園を選んだ。

やはり、ランニングをすることによって、自分の中で変動性と安定性の最適なバランスが再形成されるような効能がある、と改めて実感した。先週の木曜日はランニングに出かけることができなかったため、自分の中の変動性と安定性のバランスに若干の歪みが生じていたようである。

ランニングの最中、その歪みが徐々に解消されていくのを確かに感じた。週に二回の運動は、自分の内側の波を整えるためにも、そして自分の仕事を継続的に進めていく上でも必須のものであると思う。

ランニングから戻ってくると、午前中の仕事のはかどりに対する自分への褒美として、午後からは、構造的発達心理学における理論構築手法に関するメタ理論をテーマにした書籍に目を通していた。それらの書籍は、一昨日から読み始めていた“Annals of theoretical psychology vol. 7. (1991)”と“Theory building in developmental psychology (1986)”である。

両者はともに、元フローニンゲン大学教授ポール・ヴァン・ギアートが編集に携わっている専門書である。今日は、主に前者を中心に読み進めていた。本書を読み進める中で、改めてアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドとアンリ・ベルグソンという二人の哲学者は、発達科学に多大な貢献を果たしていると言わざるを得ないと思った。

ホワイトヘッドは、「プロセス」という現象を中心に、独自の哲学を展開しており、彼の哲学は、発達現象をプロセスとみなすことを強調する近年の発達科学と通底する思想であると言ってもいいだろう。また、「時間」や「変化」を中心として、哲学的思索を深めていったベルグソンの功績も忘れてはならない。

実際に、発達心理学に多大な功績を残したジャン・ピアジェや複雑性科学に大きな貢献を果たしたイリヤ・プリゴジンは共に、彼らの知的探求の重要な時期にベルグソンの思想に触れていたのだ。この事実を知る前に、私もホワイトヘッドとベルグソンの仕事が大変気になっており、これまで少しずつ彼らが書き残した哲学書に目を通すことをしていたため、ピアジェやプリゴジンが両哲学者の思想に影響を受けていたことは、私を大いに励ますことになった。

© YOHEI KATO 2017

ただし、ホワイトヘッドにせよベルグソンにせよ、彼らの仕事を正確に理解しようと思うと、他の全ての仕事を一旦中止して、一年間──下手をすると数年間──ぐらいの集中的な文献調査が必要であると思われるため、今の自分はそこに踏み込んでいくことはできない。

短期的には、自分の研究プロジェクトに関する学術論文を読んでいくことを優先させながらも、休憩時間に彼らの哲学書に少しずつ目を通していきたいと思う。長期的には、いつかどこかの大学院の哲学科に所属して、集中的な探究をしてみたいと心から強く思う。2016/10/23

© YOHEI KATO 2017